
東方癒式猫

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方癒式猫

【Nコード】

N2275BA

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ある日、なぜか白い猫又に転生してしまった主人公。彼は、東方の世界で何をして、誰と会い、何を思うのか？

東方の二次創作小説です。キャラ崩壊、オリキャラ介入などなど、二次創作要素満載です。苦手な方は、ブラウザバックをおすすめいたします。

プロローグ（前書き）

また、KSみたいな小説を書いてしまった。

プロローグ

「ここどこ？」

そんなことを呟く僕は、……えつと……名前なんだっけ？
まったく思い出せない。何でこの森の中にいる前の記憶がないんだ？……へ、なにこれ？新手の嫌がらせ？それとも、何かのテンプレか？……とりあえず落ち着こう。もちつこう。それよりも、気になるのは……。

「とりあえず……。のど渴いたし、水を探すか。」

そんな事を言いながら水を探し始める僕。本当にのどが渴いた訳ではない。ただ単に落ち着きたかったのである。

見つけた。どうやら湖のようだ。周りは、草木に囲まれている場所だ。

「うん。水美味いけど……。何で猫になつてるんだ？」

さつきから、どうも視線が低いと思ったんだよね。どうやら白い猫のようだ。しかも……。

「尻尾が二本あるんですけど……。」

思い当たるのは、『猫又』

『猫又』

猫股とも書く。年を取った飼い猫が変化^{へんげ}した妖怪。

葬儀場や墓場から死体を盗み、その人間になり替わったりする。黒猫の猫又が最強と言われる。

普通の猫の姿をしているが、扉の開け閉めが両方できる猫が猫又と言われる妖怪である。

「……まあ、僕は、白だから最強じゃない訳だ……。まあ、

人間だった時も平和主義を貫いてたからちょうどいいか。」
そんなこんなで僕の妖怪ライフは、始まりを告げたのであった。

プロローグ（後書き）

短いですね or z 誤字脱字などありましたらお気軽にお寄せください。

鬼さんですか、そうですか（前書き）

今回、結構時間。

鬼さんですか、そうですか

前回から二〇年という月日が過ぎた。・・・え？何でそんなに時が流れているかって？・・・ふっそれを気にしたらダメというものだ。

とりあえず、僕的能力？という物があることが判明した。その名も『人を和ませる程度の能力』・・・え？なにこれ・・・弱くね？まあ、平和的でいいか。そして、結構、妖力？という物の操り方も覚え始めた。

そんな事よりも、もっと驚くべきものを発見した。それは人間の住む村だ。どうやら僕は、タイムスリップ？もしたみたいで、豎穴住居である。うん。初めて見たとき僕も驚いた。

「まあ、人間に会いに行ってみるか・・・。」

そう言っ僕は、四本足で人里へと走り出す。・・・ああ、いまさらだけどなんか身体能力が凄みたいで五十m三秒台で走れた。

「なにこれ？」

そう言っしかなかった。なぜなら、人里で暴れまわる一人の男性。年齢は・・・二十歳くらいだろうか・・・。周りの人間なんか、

「うわー。」

「に、逃げるー！！」

こんな声上げて逃げ回っている。僕も逃げようかな。ちょ、男の人こっち向いたけど・・・。

「お前は何者だ？」

ヤバイ。マジでヤヴァい。完全にこっちを獲物を見つけた目で見てくるんだもん。

「ニヤアゝ。」

とりあえず、猫の振り・・・そうだ猫の振りだ。これこそ、逃げるための手段だ！！

「ごまかすな。妖怪。」

＼（＾０＾）／ オワタ

「あ、ばれた？」

「当たり前だ。鬼を見くびるなよ。」

ヤバイ睨みながら言ってくる。ハッキリ言って怖い。ああ、そうだよ、僕は、チキンだよ！チキンで悪いか！！

「・・・獣がしゃべったら変だと思ってるね。」

「獣？・・・まあ、いい。俺は、鬼の神鬼戦真だ。しんぎせんま お前も、名を名乗れ！」

「ごめん。名前無いんだ。種族で名乗ると『猫』まあ、『猫又』だがね。」

僕は、クツクツと笑って見せた。それが気に入らなかったのか戦真はムツとしたがすぐに、

「『猫』？『猫又』？そんな種族、聞いたこともないし見たこともないぞ。」

「・・・は？」

怪しくなつて周りを見渡してみると人間も首を傾げている。猫を見たことがない？そんな馬鹿な。・・・まあ、いいか。

「それより、僕に何かようですか？」

「・・・とぼけるな。そんな妖力を持つて俺の前に現れたということは分かっているだろう。」

「全然わからない。」

「・・・。」

ヤバイ。とぼけてみたら頭抱えられた。

「……。それだけの妖力を持っていたら、鬼である俺が戦いたくならない訳がないだろ？」

ニヤリと笑いながらこつちに尋ねてくる。

「つまり……。戦えと？」

「そのとうりだ。」

「ああ。空が青いな。」

「てっ、おい。とぼけるな!!」

とぼけたら突っ込んでくれた。え、もしかしていい人!?・・・妖怪か。

「……帰ってもいいですか?なんか、くる場所間違えたみたいなので。」

「逃がすとしても?・・・てっ、おい!!」

とりあえず、にげてやったZE 三十六計逃げるにしかずつてな。

・・・森の中・・・

「待てやコラー!!」

「待てと言われて待つやつがいるか!!」

「じゃあ、逃げるな!!」

「同じじゃねーか!!」

そんなことを言いながら鬼から逃げるために僕は、絶賛逃走中である。あいつ速いし。僕に普通についてくる。てか、なぜこの状況で目の前に崖あるし!

「さあ、追い詰めたぞ。おとなしく戦え。『猫又』とやら。」

「分かったよ!!戦えばいいんだろ!!」

「その通りだ。」

「いくぞ!!」

勢いよくこぶしが飛んでくる。僕は、紙一重でそのこぶしを避け

た。こぶしが地面に当たるとそこがクレーターのようになっていた。

「そんな威力ありかよ……。しかも、能力もちだな？」

「ほう、よく分かったな？その通り、俺の能力は『力を調整する程度の能力』だ。」

「チートだな。」

さて、どうしよう？

- 数刻後 -

やあ、まだ交戦中なんだ。でも、勝つ方法が浮かんだ。

「いつまでも避けてるんじゃ勝つことは・・・グフ。」

とりあえず、一蹴りしてやった。そして、妖力弾を放つ（もちろん手加減なしの）。

「そんな物……。く……。く。。。」

命中した瞬間戦真は倒れ掛かった。その瞬間にばくは、一番大きな妖力弾を頭上に作り出す。

「……。くつ、まだ終わら……。『いや、終わりだよ。』……。な！？」

気づいたところでもう遅い。僕は、すでに妖力弾を投げていた。

「えっ、ちょー！？」

命中した。

鬼さんですか、そうですね（後書き）

今回無理やり感が半端じゃない・・・。

ぶんぶんぶん。 鬼が飛ぶ（前書き）

一日、三話投稿はきついですね。明日から学校・・・ウボア。

ぶんぶんぶん。鬼が飛ぶ

・・・とある洞窟内・・・

side 戦真

「ん・・・ここは？」

そんなことを言いながら目覚めた俺は、戦真だ。今は、見慣れない洞窟の中にいる。とりあえず言えるのは、先ほど戦った『猫又』とか言ったか？あいつが運んでくれたのだろう。それを結論付けるように近くの岩の上に寝ている。力が強いのになぜ、奴は人の形をしていないのだろうか？この俺は、妖怪の部類では強い部類に入る。まあ、種族というのものもあるが・・・。それなのになぜ？

「ん、ん〜。」

奴が伸びをした。可愛いと思った俺は間違っているだろうか。

「お！起きたのか？」

「ああ。」

「よかったな。傷も癒えたみたいだし。」

そう言って笑いかけてくる。

「・・・なぜ？俺を殺さなかった？」

「え？ああ、理由がないからな。それに、殺すとかそういうの嫌いなんだよ。」

「・・・。なるほど。」

まったく不思議なやつだ。妖怪の筈なのに殺しを嫌うとは・・・。

「そういうええ？なぜ僕に戦いを挑んだ？鬼の本能とは別の理由があるんだろ？」

「・・・ああ。この山の丁度上くらいに鬼たち住んでるんだよ。だが、そこには鬼神がいない。そこを俺が力を示して鬼たちをまとめようと思ってだな・・・。」

「で、妖力のある僕を倒してその材料にしようとしたわけだ。」

「ああ……。」

「まあ、やりたいのならその鬼たちを倒してお前がなればいいじゃない。」

「……は？」

「だから、お前やりたいんだろ？ならやればいい。」

「だが、一番力の強い者が弱い者を導くのが当たり前だろ？お前の方が向いている。」

そう、俺に打ち勝った『猫又』の方が向いてるんだ。

「僕は……お断りだね。頼まれても。」

「な！？……。」

信じられない。なぜだ？普通は誰もがなりたいものじゃないのか？

「僕には向かないよ。……そんな役。」

「そうか……。よし！なら俺がやるしかねえ……！！」

もう、いろいろと吹っ切れた。

戦真 side out

猫又 side

一言言える。なにこれ怖い。今の状況、戦真が「俺がやるしかねえ……！！」山を登る 鬼たちのところに到着 俺がこの山の頭になる！ 鬼さん達がキれる 「なんじゃい、我！寝言は、寝てから言え！！」 戦真がキれる にらみ合いが始まる 今この状況

完全な一触即発の状況。

「待ちな……！！」

「……？」「……」

「あんた見ない顔だね……。どこの誰かも分からん鬼にこの山を任せられるか！ここの鬼全員に勝ったら認めてやるよ……！！」

女性の鬼がそう言い放った。

「いいだろう。それで、認めてもらえるならな！そのかわり！雑魚どもは、こっちの『猫又』が相手をする。そして、一番強い奴が俺とやる！どうだ！」

「チョイ待て！何で僕まで戦うことになってんだ！？」

「お前とて戦いたいだろう？妖怪ならな？」

「だから、言っただけ。僕は戦が好きじゃないの！分かった！」

「いいだろう。私がお前の相手だ。ほかは、そのひよろいのをやっちまいな！！」

「……………おう！！姉さん！！」「……………」

怒ってもいいよね？

「くたばれや！！」

そんな事言っただけ掛かってくる鬼が一匹。

「くたばったまるか！」

「ウボア！」

ヤバイ。蹴ったら吹っ飛んだ。

「全員でかかれ！！鬼の勇猛さを見せる時だ！！」

「……………うお……………！！！！！！」「……………」

「はあ。」

そのため息を吐いて。高速で走りながら確実にけりを入れていく。蹴りだからどんどん鬼が吹っ飛んでいく。よしあれ歌うぞ！

「ぶん、ぶん、ぶん。鬼が飛ぶ。」

「グヘ！」

「オブ！」

「猫の周りに鬼がゝたかるよ。」

「グア！」

「チョブ！」

もうこの時点で鬼の数は残り一匹になってた。

「ぶん、ぶん、ぶん。鬼が飛ぶ！」

「ハガ！」

最後の鬼を蹴り飛ばした後、僕は

「エイドリアーン！」

と叫んで、腕・・・前足両方を空に向けて突き出した。

『猫又』 side out

「終わったみたいだね。こっちも始めようか。」

「ああ。」

「私は紅蓮花歌ぐれんばなうた！この山の鬼を代表してあんたの決闘に受けて立つー！」

「俺の名は神気戦真！決闘を申し込むー！」

・・・夜の山・・・

「戦真見事な戦いだつたね。」

「てつ、見てたんかい！」

そんな会話をしながら鬼＋猫又一匹は宴会中である。ちなみに主人公はお水である。

「それにしても、あんたの名前は？鬼を一人で蹴散らす妖怪の名を聞いてみたいんだよ。」

「え？僕の名前？」

「こいつには、名はないらしい。」

「は？こんなに強いのに名前がない！ウソだろ？」

紅蓮は信じられないといった表情で主人公に尋ねる。

「僕の名前は・・・ウカノ・・・だ。」

「な！？お前名前無いつてー！」

「いや、ゴメン。前は嘘ついてた。（今適当に考えただけなんだからね・・・。）」

「そうか、ウカノだね。私は紅蓮花歌て言うんだ。よろしく頼むよ。」

「よろしくね。僕の二人目の友達。」

「「友達？」」

「うん。だってここまで触れ合いを持ったら友達でしょ？」

「一人目は？」

戦真は気になって聞いてみた。

「もちろん、戦真・・・君だよ。」

「そうか。」

こうして、『猫又』改め『ウカノ』に二人の友達ができたのであった。

ぶんぶんぶん。 鬼が飛ぶ（後書き）

きつい・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2275ba/>

東方癒式猫

2012年1月5日22時50分発行